愛知工業大学研究報告
第39号A平成16年

文学作品にみられる身体について
岡本かの子の諸作品を手がかりとして

A study of body appeared in Literary Work with reference to the works of Kanoko Okamoto

山　田　岳　志
Takeshi YAMADA

Abstract　The aim of this study is to make clear the literary image of body in relation to the social structure the early Showa era. For this paper, the works of Kanoko Okamoto to examind here. Literature works have been thought to be a useful means of as seeing of body. Literature makes it possible to analyse of contemporary society more realistically than by social science.
Because it tend to show the time and society more vividly by its free imagination.
To explain in body through literature seems to be most suitable approach. For this point of view, the image of body appeared in literary work the early Showa era discussed , in this paper, mainly concerning body treated in the works of Kanoko Okamoto.

1.　はじめに

岡本かの子の諸作品にはスポーツ、健康そして身体についての記述が多数散在する。例えば、『渾沌未分』、『快走』、『丸の内草話』、『肉体の神曲』といった長編あるいは中編に限っても多くの作品がみられるし、また『健康三題』、『世界に摘む花』等、彼女自身の体験にもとづいて書かれたと思われる作品も多数みられる。川端康成は、こうした岡本かの子とスポーツ、あるいは身体との係わり方を評して「岡本さんほど、官能の匂ひにむせぶやうに、肉体を描いた作家は、日本文学の古今に、殆ど類を絶する。」[1]と指摘している。では、岡本かの子の諸作品の中でスポーツあるいは<スポーツする身体>はどのように描き込まれていくのだろうか。岡本かの子の諸作品の中にあって、彼女がスポーツを描く意味を最も象徴していると言われる『丸の内草話』を挙げてみる。[2]主人公の〈一木〉は、「相当な実業家の令嬢」であるが、「洋裁店のマネキン」になったり、「歌劇の後援会」をを立ち上げたり、また「文化生活の雑誌」を刊行したり、「ティ・ハウスのマネジャー」やさらには「一坪園芸の郊外地」を経営したりしたが、どれも永続きしない人物として描かれている。[3]その〈一木〉に浮かんだ新たなプランが、〈一木〉の兄の友人が「何か様式の変った興業館にする目的」で手がけていた建物を「体育館」にすることであった。[4]「日光の光線が透き入って、皮膚がうす紅梅色に華やぐ。髪の毛は緑の焔のやうに揺らぐ。その若い男女の肢体が、一人々々、有る限りの骨格筋を酷使して、そこに陥没を伴ふ肉体の隆起が有る（中略）全体の眺めとしては、幾百筋の腕や胴や脚で縦横に織り出す肉体の新緑の紋様である。余地を埋めて鐵丸が飛ぶ。槍投げの槍が飛ぶ。オン・ザ・マーク・ゲセット！爆声―砂は噴き、土は旋転する」。[5]このように『丸の内草話』の中に描き込まれていく身体は、丸の内のサラリーマン達が昼休みにするようなキャッチボールとかテニスとは違って、スポーツの即身成仏性という「かの子的大乗仏教」の見地から描き込まれていくのである。[6]また岡本かの子の諸作品にはスポーツや身体を通して古代賛美が描き込まれていく。例えば、『スポーツ抒情』において「肉体にしても単純に強健に発展してゐるのはどうも意味がない」と強調しながら、「単なるギリシャ型

愛知工業大学　基礎教育センター（豊田市）

よりも文芸復興型の肉体を好ましく思う」[7]と言って「意志」と「精神」が調和されて「全体が熱情的に彫刻されている肉体」[8]こそ意義があると指摘しているのである。このような岡本による身体を通しての古代賛美は『健康三題』という短編の中にも描き込まれていくが、シャールトンによれば「スポーツをめぐって古代ギリシャを語るというのは、スポーツを文化的、知的、芸術的なアウラで飾ること」[9]と指摘している。岡本かの子の諸作品における古代賛美の背景にも＜スポーツする身体＞の芸術化、崇高化を意図するものが込められていたように思われる。[10]さて、岡本の死後、遺作として発表された『生々流転』にも＜スポーツする身体＞が描き込まれている。しかもそこには＜スポーツする身体＞の二つの側面が描き込まれているように思われる。その一つは女性解放の典型とみられるような自己解放の文脈から捉えることができよう。さらには「文学はたしかに一つの社会表現」であるとか、文学作品は「時代の風俗を映し出すリアリズム小説としての性格」を持つと指摘されるように[11]、岡本かの子の諸作品の中にも＜スポーツする身体＞が国家理念との係わりで描き込まれているように思われる。そこで、本論では文学作品をそれ自体、社会と積極的に係わることによって意味をもつ、いわば、自立した文化社会学の一フィールドとしての捉えながら、岡本かの子の諸作品の精解ではなく、発表された諸作品を追って、そこに描き込まれている＜スポーツする身体＞について概観してみたい。それはまた文学作品と身体との係わり方を追究するための大雑把な予備的試みでもある。

２．　かの子のスポーツ体験

川端康成によれば、岡本は「スポーツの動力的に躍動し緊張する一瞬の女体にも、ナルチスムスの恍惚と戦慄とを岡本さんは感じたのである。その姿に美の一つの極限を見、そしてスポーツの一瞬の姿態にも《全自我の表現》、《永遠の隕石の速力》そして《即身成仏》を見た」[12]と指摘している。このように岡本にとって＜スポーツする身体＞は生命の再生と生命の崇高化をはかるものとして彼女の諸作品の中に描き込まれていくのである。さて、岡本かの子は諸作品の中において、主人公の身体を支える＜スポーツする身体＞の描写をものにしたと指摘されるのであるが、では、岡本自身のスポーツ体験はどのようなものであったろうか。岡本の全文学のなかにあって理想的な美少女像を描いていると言われる『渾沌未分』は水泳教師をする若い娘〈小初〉の物語である。しかしながら瀬戸内晴海の指摘によれば、「かの子は海は好きだったが、赤い水着をつけて、ぽちゃぽちゃ犬かきをする程度で、泳ぐというより浮いているという腕前」[14]ほどのものであったという。泳げない岡本が、「水中の世界の妖しい美しさ、その上水中の男女の戯れの息づまるようなリアリティのある描写を可能にしたのは一つの流儀をもつほどの水泳の腕前であった、（中略）一平の適切な助言」[16]があったからだと言われている。しかし、負けず嫌いの一面を持っていたと言われる岡本は、「学問で脅してくるものには学問をもって応じた」[16]と言われるように、ある事情で西洋舞踏の知識の造詣を必要とするようになった時、彼女は舞踏家の岩村和男氏に師従してダルクローズの舞踏体操の訓練を受けるようになったのである。しかし、この「ダルクローズは専門的にも専門的のもので素人には堪え切れないほどの厳しいものだった。腱だの筋肉だの形を改造してかかる猛練習」[17]であったが、しかし、岡本はついにこのダルクローズを修得したのである。スポーツ史の教示してくれるところによれば、このダルクローズとは２０世紀初期に女性のための体操改革運動の一つとして、スイス人のエミール・ジャック・ダルクローズによって考案されたもので、体操と音楽リズムを結びつけた、いわば「リズム体操」と言われるものであった。そして、ダルクローズは、体操による「精神の肉体化、肉体の精神化」という目標を掲げながら、こうした「リズム体操」が実践されていく「リズム学校」は、またヨーロッパ精神界の出会いの契機をもたらす場としても機能するように期待されたと言われる。[18]こうして、岡本にとってもダルクローズの体験は『肉体の神曲』、『やがて五月に』等の諸作品の中に描き込んでいくのである。「私はその頃ダルクローズの舞踏体操に凝ってゐた。仕事に疲れて来ると忽ち室内着を脱ぎ捨てスポーツシャツ一枚の姿で縁側でトレーニングをやった。私の肉体は相当鍛えられてゐたから四肢の活躍につれ、私の服や腕にギリシャの彫刻に見るやうな筋肉の房が現れた」[19]と言うように、岡本にとってこのダルクローズの体験は健やかに動く身体の美として描き込まれていくのである。さて、岡本がダルクローズをはじめた動機は、気分転換をはかるため、また肥満防止をはかるためでもあったと言われる。しかし、こうした動機ではじめたダルクローズの訓練も、岡本にとっては相当厳しいものであったらしく、凝り性で負けず嫌いの岡本もその厳しさに堪えきれずに途中で投げ出してしまったほどであったと言われている。[20]こうしたダルクローズの体験についても岡本は『梅・肉体・梅』の中に描き込んでいるのである。「私が舞踊を習はうと思ひ立つたのは極くあつさりした考えからだった。詩へ盛り余った気分を、踊りで気晴らしたらさつぱりするか

も知れないと思つたからだ。（中略）たった一人部屋の中で踊る慰みには少し大げさな師匠取りとは思ったが、勧められるまゝにW先生に来て頂いた。（中略）稽古は梅の咲く頃から始まって翌年の梅の咲く頃に終つた。終つたというよりも私が振り切ってやめてしまったと言ふ方が本当だ。稽古の厳しさに堪えられなくなったからだ。一体ダルクローズの舞踊基本体操といふものがプロフェッショナルなもので、生やさしくない上、先生の仕込み方がひどかった。筋肉と筋肉とを分けるのだといっては手足を自然以上に捻ぢ廻したり、頸の胸鎖乳筋を掴んで鎖骨をメリツといふほど伸ばした。（中略）鏡の中に立つ私の肉体は、それは乙女でもあり青年でもあった」。[21] さて、岡本にとってズダルクローズ訓練の契機ともなったと言われる、肥満防止のための体験もまた彼女の作品の中に描き込まれていくのである。『肉体の神曲』の中の肥った〈茂子〉は、「いくら学校がよく出来たつて、も少し身体つきを人並みにしなきゃ……」[22] と姉の和佐子から露骨に肥満した身体を批判されるのである。そこで、〈茂子〉は肥満解消の目的で単身、岐阜の縁者を頼って出かけるのであるが、その時〈茂子〉が鞄の中にしのばせて持っていったのが「オーストリアの体育家の科学的自然運動」[23] という本であった。さて、岡本にとって＜するスポーツ＞がダルクローズに集約されるとすれば、＜みるスポーツ＞の描写も岡本かの子の諸作品の中に多数散在するのである。岡本は昭和４年から７年にかけてヨーロッパでの生活を体験している。このヨーロッパでの生活体験は、その後の岡本のヨーロッパ観を構築する上で貴重な体験であったと指摘されているが、[24] ここでは『体育』、『世界に摘む花』の中に描き込まれている岡本の＜みるスポーツ＞について概観してみる。「私は、嘗てオーストリアの首都ウィーンで、体育家の人気者ホーエンスタインという人に面会しまして、親しく氏の自然運動科学の実地を見せて貰いました。ところはウィーン市のコニー島というところにある自然運動学校でありました。（中略）それから氏は独特の体育方法を紹介されました。（中略）氏が自然運動によって得られた均斉の取れた体格とその機能には私は感じ入りました。」[25] というように、岡本のヨーロッパでの体験は生命力としての＜するスポーツ＞の見聞を体験したのである。『肉体の神曲』の中の肥った〈茂子〉はまさしく、この「自然運動」の体験を描き込んだ作品でもあったと思われる。さて、岡本は『世界に摘む花』の中で、「英国スポーツ」について描写している。では、彼女は１９３０年代のイギリス社会とスポーツとの係わり方をどのように捉えていたのか、ここでは岡本におけるイギリス・スポーツの解釈について概観してみる。まず、岡本にとって、イギリスという国は何かにつけてスポーツに「因縁」をつけたがる国であると認識していくようである。[26]「クリケットがイギリスの国技とされている。この競技はスポーツの中で規則がやかましい方だ。その規則の厳格は競技者におのづと立派な態度を指令する。スポーツに道徳の美観を求めるイギリス人に取って彼等の要求に応ずる性質の多いクリケットが国技の位置に上がったのはこの適応性による。」[27] と言うように、岡本はここでクリケットというよりもスポーツとイギリス人との係わり方を観察しているように思われる。こうして、岡本によるイギリス・スポーツに対する観察の描写はさらに続くのである。「クリケットはイギリス人の国民性を公式にスポーツに反映する」、[28] その意味ではクリケットは多くのイギリス人によって支えられた国技であると指摘しながら、その支持基盤は上層階級に限られており、下層階級といえばクリケットよりもフットボールをより支持していると指摘しているのである。その理由としての岡本の分析はこうである。「民衆は道具を沢山用ゐる繁雑な規則の下に行はれる比較的冷静な計数観念の克服が要る」[29] クリケットに対して下層階級はそこに貴族階級的要素を感じ取っているようである。それに対してフットボールというスポーツこそは「単純で肉闘的で熱狂できる無条件な直接を覚える」から下層階級に支持されると分析するのである。つまり、岡本はクリケットとフットボールの支持基盤の背景をイギリス社会における階級的なハビトゥスの差に求めているように思われのである。「クリケットがクライマックスに入る時、観衆はチョッキの胸脇に拇指を突っ込み、扨、といって腰を据える。ロードの競技場が地下二尺ほど沈下したやうな静けさ」[30] であるのに対して、「フットボールがクライマックスに入った時、見物は子供を宙に投げる」[31] と言うのである。こうした岡本によるスポーツとイギリス人との係わり方についての分析は、具体的にはスポーツと階級との係わり方、あるいはスポーツとイギリス社会との係わり方を分析しているように思われる。さて、岡本はイギリスに滞在中、多くのスポーツ状況を見聞しているように思われる。そして特にオックスフォード対ケンブリッヂの競漕に対する、階級を越えた熱狂ぶりについて「これは例のイギリス人気質で熱狂すべき日に熱狂の義務を果たさないと一年間の生活プログラムを狂うやうに感じるからだ」[32] と分析しながら、またイギリス・スポーツの発展起因についても分析してみせるのである。「冬の霧が去り季節が他に移った晴天の日にさえこの狭い島国を巡る海上の気流が島全体に何か憂鬱を送って来る。人々は自ら快活を打撥することに努めなければならないと必然的に戸外に出る。日曜一日

は必ずゴルフ場で、テニス場で撲つ、蹴る。人々はそれを意識しないでも各々スポーツの器具を通じて自然への挑戦的態度を取る」[33]と分析するのである。岡本によれば、イギリス人のスポーツへの係わり方は、それはあたかもイギリス人の自然に対する係わり方の象徴である、というように分析してみせるのである。

３．かの子の諸作品に見られるスポーツ

川端康成が、岡本かの子は「スポオツを歌にも詠み、また作品のなかに度々主人公を肉体的に描き込んだ」[34]と指摘しているように、岡本かの子の諸作品の中には＜スポーツする身体＞についての記述が多数散在するのである。ここでは管見に入った限りで岡本かの子の諸作品にみられるスポーツを一覧表にして、そこにみられる＜スポーツする身体＞がどのように描写されているのかを、岡本の言葉を通して概観してみる。

＜岡本かの子の諸作品にみられるスポーツ・身体＞
「母と娘」（『女性文化』昭和９・５）
「梅・肉体・梅」（『文芸』昭和１０・２）
「春の濱別荘」（『週間朝日』昭和１０・３）
「スケーター・ソニヤ嬢」（『モダン日本』昭和１０・６）
「ゆき子へ」（『令女界』昭和１０・７）
「可憐なスポーツ」（『読売新聞』昭和１０・９）
「スキー」（『大法輪』昭和１１・２）
「小町の芍薬」（『むらさき』昭和１１・４）
「捕手の姿」（『読売新聞』昭和１１・４・２７）
「スポーツと女性」（『大法輪』昭和１１・５）
「水」（『読売新聞』昭和１１・７・６）
「オリンピックの炉火」（『読売新聞』昭和１１・８・１５）
「青年よ粘れ」（『読売新聞』昭和１１・８・２７）
「渾沌未分」（『文芸』昭和１１・９）
「婦人と体育」（『大法輪』昭和１１・９）
「肉体の神曲」（『三田文学』昭和１２・１）
「母子抒情 」（『文学界』昭和１２・３）
「金魚撩乱」（『中央公論』昭和１２・１０）
「落城後の女」（『日本評論』昭和１２・１２）
「スタンドの内外にて」（『女の立場』昭和１２・１２）
「スポーツ抒情」（『女の立場』昭和１２・１２）
「国民保健」（『読売新聞』昭和１２・１２・９）
「やがて五月に」（『文芸』昭和１３・３）
「健康児座談会に臨みて」（『東京朝日新聞』昭和１３・７・５）
「老妓抄」（『中央公論』昭和１３・１１）
「快走」（『令女界』昭和１３・１２）
「丸の内草話」（『日本評論』昭和１３・１２）
「娘」（『婦人公論』昭和１４・１）
「河明り」（『中央公論』昭和１４・４）
「生々流転」（『文学界』昭和１４・４～１２）
「雛妓」（『日本評論』昭和１４・５）
「耐久力」（初出未詳）
「是非望ましいのは世界的選手—女子スポーツ—」（初出未詳）
「気力と体力」（初出未詳）
「永遠の若さ」（初出未詳）
「英国のスポーツ」（初出未詳）
「体育」（初出未詳）
「試合の練習」（初出未詳）
「誰でも持ったから」（初出未詳）
「慰安感覚の更新」（初出未詳）

昭和１３年、雑誌『令女界』１２月号に発表された『快走』には女学校時代ランニングの選手で現在は家事手伝いをしている〈道子〉という娘が、月明かりの堤防をランニングする場面が描き込まれている。「女学校在学中ランニングの選手だった当時の意気込みが全身に湧き上がって来た。道子は着物の裾を端折って堤防の上を駆けた。髪はほどけて肩に振りかかった。ともすれば堤防の上から足を踏み外しはしないかと思うほどまっしぐらに駆けた。（中略）さすがに身体全体に汗が流れて息が切れた。胸の中では心臓が激しく衝ち続けた。その心臓の鼓動と一緒に全身の筋肉がぴくぴくふるえた。（中略）ほんとうに発利と生きてゐる感じがする」。[35]このように岡本は健やかに動く＜スポーツする身体＞の一瞬の姿態をも生命の象徴として描き込んでいくのである。また岡本のスポーツ賛美は彼女自身の体験を通しても語られていく。例えば、『捕手の姿』、『スタンドの内外にて』等においては、女性解放の手段としてのスポーツの効用が描き込まれていくのである。

４．「生命」としての＜スポーツする身体＞

さて、岡本かの子の諸作品において、例えば『丸の内草話』、『快走』、『渾沌未分』、『娘』等のような長編、あるいは短編においても＜スポーツする身体＞が描き込まれていく。川端康成は、岡本かの子の諸作品のこうした傾向を評して「スポオツの動力的に躍動し緊張する一瞬の女体にも、ナルチスムスの恍惚と戦慄とを岡本さんはかんじたのである。」[36]と指摘している。確かに岡本か

の子の諸作品にみられる＜スポーツする身体＞の描写は身体を躍動させることで身体を越えて、「生命」の再生をはかるものとして描き込まれている場合が顕著のように思われる。例えば、『スポーツ抒情』において身体も単に強健にするだけが強調されるのではなく、「全体に熱情が彫刻されてゐる肉体に津々たる魅力ある」[37]と言うように、岡本が描く＜スポーツする身体＞には「生命」を意識させるような立場からの記述が多数散在するのである。ここでは、岡本かの子の諸作品にみられる＜スポーツする身体＞の意義について概観してみる。さて、岡本の文学のあらゆる芽を内包していると指摘される『渾沌未分』の〈小初〉は、代々隅田川筋に水泳場をもった清海流の水泳教師の家柄に育った娘である。「それが都会の新文化の発展に追除けられして堅川筋に移り小名川に移り、場末の横堀に移った。そしてとうとう砂村のこの材木置場の中に追い込まれ」[38]ていったと言うように、そうした環境条件のなかにあっても「清海流の水泳の最後の道場」を死守しようとする水泳教師である。〈小初〉の＜スポーツする身体＞を岡本は、冒頭から次のように描き込んでいくのである。「小初は跳ね込み台の櫓の上板に立ち上つた。（中略）軽く炉形に灼けた右腕の上側はココア色に日焦けしてゐる。腕の裏側から脇の下にかけては、さかなの背と腹との関係のやうに、急に白く柔くなって、何代も都会の土に住み一性分の水を呑んで系図を保った人間だけが持つ冴えて緻密な凄みと執拗な革柔性を含んでゐる。やゝ下ぶくれで唇が小さく咲けて出たような天女型の美貌で（中略）中柄で肉の締つてゐる女水泳教師の薄い水着の下には母性的の威容と逞しい闘志とを潜ましてゐる」[39]。岡本によるこの水泳教師の〈小初〉の身体描写こそは、＜スポーツする身体＞によって支えられた身体であり、彼女にとっては「生命」の再生を期待するような身体として描き込んでいるように思われる。さて、岡本によるこうした観点からの身体描写は『娘』の主人公であるスカルノの漕ぎ手の〈室子〉の場合も同様である。「室子は頬を撫でても、胸の皮膚を撫でても、小麦いろの肌の上へ、うすい脂が、グリセリンのやうに滲み出てゐるのを、掌で知り、たつた一夜の中にも、こんなに肉体の新陳代謝の激しい自分を、まるで海驢のやうだと思った」[40]と言うように、ここでの〈室子〉の身体も＜スポーツする身体＞によって支えられた身体であることは言うまでもなかろう。そして、スポーツする時の〈室子〉の身体といえば、「その逞しい四肢が直接に外気に触れると彼女の世界が変わった。（中略）肉体と自然の間には、人間の何物も介在しなかった。」[41]と言うように、岡本は＜スポーツする身体＞に生の躍動を感じ取っていくのである。さて、『丸の内草話』の主人公〈一木〉の場合はどうであろうか。「イギリスの文学者ローレンスが健康な理性を求めて、南米に渡ったり、大戦前後の巴里の芸術家たちがラテン系の西印度諸島の土人の芸術を巴里に輸入することに努めて生命の充実を図ろうとした」[42]時に、〈一木〉が欧州で体験した「文化や物質生活の爛熟に飽きた貴婦人社会のアンニュイの気分が何か創造しかけるものに向って、だが、しかし、と半ば否定のやうな批評を下しかけ、芽生えのしんを萎えさせて仕舞ふ」[43]ようなバット・クラスこそは生命力を失った貧血性の近代人であると捉えていくのである。しかし、「わたし達だって、同じ近代人ですから患者であって看護婦ではありません」[44]と言う〈一木〉流の近代人による近代の克服こそは、〈一木〉をして体育館建設の動機となっていくのであ。そうした〈一木〉にとって「生まれながら肉体を燃やしつつあるエネルギーの匂い」そして「生命を気化して肺臓から圧し出す呼吸の音楽」といった「苦悶の表情から言えば地獄の群像」と「その愉悦の肉体感を察すればこれはまた天国の群像」[45]という、この二つの事象の結合こそは身体の「一連の肉体の動勢上に備はっている」[46]若き生の姿そのものであると言うのである。そして〈一木〉自身が言うように、「自分は今まで、幾つかの文化的と思ふ事業を生んできたが、どれも中途半端で投げ出している。しかし、自分はどうかしてこの紋様を織り出す織女になりたい」[47]という観念にかられて体育館建設に取りかかるのであるが、〈一木〉が「光弾のやうな言葉」で

「白血球の歯力をもって—」
「オリーヴの匂ひのする肉体の柔軟性—」
「スポーツの即身成仏性—」
「燃えつきない永遠の隕石を想定しての速力—」
「五体、合わせて、一つの腕、或は脚—」
「腱と筋肉の蝶と鳥—」
「太陽も懐き寄る、健康—」[48]

と認識されていく＜スポーツする身体＞こそは岡本が理想とする女性像を支える身体として、彼女の諸作品の中に描きこまれているように思われる。川端康成によれば、『丸の内草話』の主人公〈一木〉こそは、岡本が理想とする女性像の体現者であり、彼女が繰り返し描いてきた一連の理想的な女性像であったと指摘している。[49]この〈一木〉という実業家の娘に言わせしめた言葉こそは、岡本が諸作品の中に描き込んでいく＜スポーツする身体＞の意味を象徴しているように思われるのである。

5．解放としての＜スポーツする身体＞

岡本かの子は『是非望ましいのは世界的選手—女子スポーツ—』において、「毎日スポーツ記事が賑々しく出てゐる。この際私はスポーツの重要性に就いて一言」提言したい[50]、と言いながら女性とスポーツとの係わり方について記述していくのである。確かに、岡本かの子の諸作品の中にはスポーツを女性解放の立場から描き込んでいるような作品が多数散在するのである。ここでは岡本による女性の社会進出、あるいは自己改造という立場から、それに係わるスポーツのもつ意義について概観してみる。『生々流転』の女体育教師〈安宅先生〉は「栃木県下で女学校の体操教師をしてゐるときに、スキー場で学園創立以前の校長先生と知り合いになり、スポーツの国フヰンランドに留学した」[51]体験を持っている。そして「学園創立に当つて帰朝し、学園のスタッフとなり、そのスポーツ上の新知識と、理想家肌のところは学園の教職員のみならず、一般女子体育家の間にも推重された」[52]人物である。その〈安宅先生〉は古い因習や観念からの解放を求めて「これからは自分の性格も肉体も全然反対の方に造り直してくるのだ」[53]と言って東京に出て女体育教師になったのである。勿論、〈安宅先生〉がここで主張している身体の改造が自己改造を内包するものであることは当然であろうと思われる。と言うのは〈安宅先生〉の「長身で整った身体に鳶色のジャンバー」[54]姿とか、「北欧風の、色は渋いが縞の荒い男もの」のガウンを来た姿、あるいは「小さなマドロスパイプ」[55]を銜えていると言ったような身体技法などはまさしく古い因習から解放された近代女性像の象徴であるかのごとく描き込まれているのである。さて、岡本かの子の諸作品にはスポーツによって自己改造をはかったり、あるいはそれによって女性の社会進出の契機をもたらすような記述が多数散在するのである。「飛び込み台の跳ね板の突端に、両手を水平に差し伸べて、今や将に飛びこもうとして、心身を整えた婦人ダイヴァの姿こそ世に美しいものはない。（中略）しかも極めて英雄的である。（中略）蒼空の白雲のみ移り、小旗のはためく音のみ耳に立つ。身よ、胸の張りから腰部へかけての弧線を。私はこのときくらゐオール女性の自信と威厳を抽象して表現されたことを見ない」[56]と言うように、実際、女性の本格的競技スポーツへの進出は女子高等師範学校で開催された女子連合競技会からであると言われる。そして１９２６年には日本女子スポーツ連盟が結成され、昭和期に入って女性の競技スポーツはさらに活発になっていくのである。「オリンピック冬季大会に於いてわが選手等は、予想以上の成績は得られなかったにせよ意気はますます盛んであることは、選手達の談話によって明らかである。女子選手達亦同じである。私たちは女性選手たちが、すこしも女性にあり勝ちな、鎖沈疲弊の態度なく、いよいよ今後を期待する健気な意気を望んで、健闘を謝すると共に涙ぐましいほど同情の念に燃ゆるものである。（中略）兎に角、わが国女性の体力の一般にめきめき向上しつつあることは、女学生のすくすく伸びた脚の線だけみても察し得られる。この一般的傾向を背景にしてわが国婦人スポーツマンの向上発達しないわけはない」[57]。岡本はこうした時代状況を把握しながら、女性のスポーツへの進出が、強いては女性の社会進出へと連なることを描き込んでいるように思われる。さて、岡本はこの時期において女性の間にも＜するスポーツ＞が盛んになってきたことを認知しながらも、女性のスポーツへの進出が競技スポーツに限られるものではないことも指摘しているのである。「女性のスポーツ熱は、ひいては一般女性のスポーツ試合の見物、応援熱をあおり立てました。例えば、野球、庭球、蹴球、水泳等の観衆の中に女性の数が毎年増加して来ました。」[58]と指摘するように、この時期の＜みるスポーツ＞についての記述も多数散在するのである。特に「野球を観るのが好きで、ゲームばかりでなく、練習を観る」[59]のも好きだった岡本の野球についての記述は『捕手の姿』や『スタンドの内外にて』において詳細に描き込まれ、そこでは彼女自身の野球の観方まで記述しているのである。さて、岡本による＜みるスポーツ＞に対する姿勢には、そこに「生命」を感じさせるような、、そして女性の社会進出、あるいは女性解放の契機としてのスポーツを描き込んでいるように思われる。そして岡本は諸作品の中で「特に願わしいのは日本女性のうちからも世界的なスポーツマンの出現」[60]することを期待していたように思われる。

６．拘束される＜スポーツする身体＞

岡本かの子の諸作品の中にはスポーツを通して「生命」を賛美したり、また女性の社会進出の契機をもたらすような方法として、スポーツと女性との係わり方を教示するような記述が多数散在することを指摘してきた。しかしながら、その一方では国家と身体との係わり方についても言及しているのである。ここでは岡本かの子の諸作品の中にみられる国家と身体との係わり方について概観してみる。「さて、日本に於いても、近年非常時に対応すべき各種の訓練が一般婦人の間にも着々行はれつつあることは洵に時宜に適したことであって、一般婦人が積極的にこれ等の運動に参加しつつあることは頼しい限りである。（中略）今日に於いては婦人と雖も国際情勢と日本の地位に関する正確な認識を持たなければならない」。[61]こうした岡本による時代的状況把握は、当然

ながら、昭和１２年７月の日中戦争突入、あるいは昭和１３年４月の国家総動員法の公布を目前にした戦時体制下ゆえの配慮が働いていたように思われる。そして特に注目すべきことは、岡本による昭和１０年代初期における社会情勢と身体との係わり方についての捉え方であろうと思われる。「近代の戦争は科学兵器による戦争であって、これ迄の戦争とは異なり、場合によっては日本の本土が敵に襲撃されることがないとも限らない。かうした場合に対応すべき平素の訓練として、敵の襲撃を受けた場合の各種の処置に対する訓練等はもとより重要なこと」[62]であるという認識から欧州大戦における各交戦国における国民の体験を示しながら、戦争と女性との係わり方を示していくのである。その一つが女性としての戦争に対する身体訓練であったように思われる。木下によれば、欧州大戦にみられた自動火器と動火器による戦闘法が、号令がなくても疎開戦闘の一員として全体の目標に向かって斉一的行動ができるように、機敏な動作ができるような身体が求められるようになった、[63]と指摘している。岡本自身もこうした時代状況と身体との係わり方を十分に把握していたように思われる。と言うのは岡本においても、国家管理の立場から女性の身体についての記述が、彼女の諸作品の中において国家理念の下での身体のあり方について描き込まれていくのである。「近頃の新聞によると徴兵検査を受ける壮丁の体格が、年々下落して、甲種合格の数が減少するという報告があった。この事実は国家にとって非常に重要な問題であって、国民保健の向上策が政府筋で次第に熱心に唱えられ出したのは当然のことである。その一つの方法として、国民一般に対して体育の普及を計ることが計画されてゐる。発育期にある青少年に適当な体育指導を与えることは苗木に水をやるのと同じく必要欠くべからざることで、近来、青少年の為の体育指導は非常に発達してきたやうである。（中略）それにも拘わらず壮丁の体格が悪化して来たということは意外である。」[64]と言うように、こうした岡本の捉え方は彼女による国家管理下での国民の身体のあり方を如実に示しているように思われる。岡本は国家と身体との係わり方を時代的条件と関連づけながら、、特に若者の体力の低下の問題を国家理念との係わりで捉えていくのである。さて、岡本が分析してみせるように、昭和１０年代初期の日本では欧州大戦の教訓を契機として国家理念の下での国民の身体の管理が展開されていくのである。昭和１２年の国民精神総動員運動の展開は人的資質の国家管理という側面から展開されていくようになり、昭和１３年には厚生省に体力局が設置され、戦時能力の向上を目指した種々の体力政策が展開されていくようになるのである。[65]すなわち、昭和１３年には青年学校国防体育大会をはじめとして国民的な身体の強化策は「体力章検定」（１９３８）、『大日本体操』（１９３９）、あるいは「国民体力法」（１９４０）の制定となって、身体の国家管理が展開されていくようになるのである。特に国民の体力政策の下に実施されていった[71]「体力章検定」や「国民体力法」は身体の国家管理の方策として制定されたものであった。岡本かの子の諸作品にみられる身体と国家との係わり方を示すような彼女の諸作品は、こうした身体の拘束と時代状況との係わり方を教示してくれるものと思われる。そして、岡本によれば「スポーツは直接競技者自身の体育の為め許りでなく、ひいては国際親善の為、更に日本民族の血の優秀さを明示する平和的手段の最たるもの」[66]として機能しなければならないと指摘しつつも、特に「日本民族の血の優秀さ」を保つためには「明朗闊達な気性、思考力の強靭、精神の持続、判断の健全と敏活、有為なる行動性―かういふものが無限に生命から装鍼填されて来る」[67]ような身体を聰ゆる専門家の知識、体験を動員して育成していかなければならないと指摘するのである。さて、こうした立場からの岡本によるスポーツと女性との係わり方について記述は多数散在するのである。「昔、ギリシャでは男子の体格を向上させるために先ず母性を強健にしなければならぬ。それが根本策であるといって、女子の体育を奨励したのであった。」[67]、「近来、女性の間に目立つてスポーツが盛んになって来たことは、女性の体格の向上を計る上から言って非常に喜ばしいことであります。女性の体格の向上は民族の繁栄を予約するものであります。」[69]この「母性を強健」にするためのスポーツ、あるいは「民族の繁栄」を保証するための女性とスポーツとの係わり方は岡本がいかに時代的条件に制約されていたかを象徴するものであったように思われる。また、岡本はスポーツと国家との係わり方について、『婦人と体育』のなかで、ヨーロッパ（特にここではイギリスとドイツ）の青年男女の体格の優れていることを「夫々の国の母親達の体格」の優れていることに帰しているのである。[70]）そして、『スポーツと女性』においては「女性には子供を生むという大きな任務が課せられてゐます。お産は女にとっておおきな肉体的犠牲でありませう。（中略）であれば、女性の体格を強靭に鍛え上げるべきです。」[71]そのためにはスポーツこそが女性の体格を強靭にするための最たる強健法であると言及していくのである。こうした岡本の諸作品にみられる文脈から察せられることは、岡本にとってスポーツと女性との係わり方というのは、スポーツとは女性にとっては母性育成のため、強いては優秀な民族を保証するための方策であったようにも思われる。確かに時代的制約を

受けながら描き込まれたように思われる岡本によるスポーツと女性との係わり方は、この時期にあって実に「皇国女子」としての身体が追求されていくようなことと同位置にあったように思われる。そして時代的には「国民体力法」が女子にも実施され、さらには「女子体力章検定」（１９４３）が制定され実施されていくようになるのである。

暫定的結語

文学作品において身体がどのように描き込まれていくのか、その試みとしてスポーツに独特の関心を示したと言われる[72]岡本かの子の諸作品を拠り所として、主に女性と＜スポーツする身体＞との係わり方に注目しながら、それも岡本の言葉を用いた方法で大雑把な追究を試みてきた。さて、川端康成によれば、岡本かの子は諸作品のなかにおいて理想の美女像を描いてきた作家である指摘している。[73]実際、『落城後の女』の〈おあん〉、『河明り』の〈娘〉、『小町の芍薬』の〈采女子〉、そしてスポーツする女性として描かれている『渾沌未分』の〈小初〉、『娘』の〈室子〉、『快走』の〈道子〉等においては、スポーツする女性の健やかに躍動する身体が主人公の生命の象徴として描き込まれているのである。また、岡本自身がヨーロッパ体験の見識を背景に修得したダルクローズは彼女自身の身体改造だけではなく、彼女が描く主人公の身体像を支える道具としても描き込まれていく。しかし、岡本にとってこのダルクローズは究極的には、彼女自身のなかのナルチスムスを内包したかたちで作品の中に描き込まれていたように思われる。『健康三題』におけるダルクローズの描写も「生命」としての＜スポーツする身体＞というよりも、そこには彼女のナルチスムス的感覚が描写されているように思われる。[74]また、岡本かの子の諸作品に描き込まれている＜スポーツする身体＞は女性の社会進出や女性解放の方策としての側面をもつ一方で、時代的制約を受けているように思われるような、国家理念の下での女性の身体のあり方の方策として言及しているのである。こうした二面性をもつ岡本のスポーツ・身体をめぐる矛盾した言説がどこにあるのかについては稿を改めたい。

引用・参考文献

１）　川端康成：「岡本かの子序説」（熊坂敦子編『岡本かの子の世界』）Ｐ．４４，冬樹社、東京、昭和５１年.

２）岡本かの子：「丸の内草話」（『岡本かの子全集』第４巻」、Ｐ．３１７，冬樹社。東京、昭和４９年.

３）岡本かの子：「丸の内草話」Ｐ．３１７.

４）岡本かの子：「丸の内草話」Ｐ．３５１.

５）岡本かの子：「丸の内草話」Ｐ．３５２.

６）安藤恭子：「岡本かの子『生々流転』—女体育家・安宅先生を中心にして—」（安川定男編『昭和の長編小説』）、Ｐ．６５，至文堂、東京、平成４年．本研究が上記の文献に依拠しながら展開されていることを付記しておく。

７）岡本かの子：「スポーツ抒情」（『岡本かの全集』第１２巻）、Ｐ．３２９，冬樹社、東京、昭和５１年.

８）安藤恭子：前掲書、Ｐ．６５.

９）三好郁朗「フランス文学とスポーツ」、Ｐ．１６７～１６７．法政大学出版局、東京、１９８９.

１０）安藤恭子：前掲書、ｐ．６５～６６

１１）川口　喬：「文学の文化研究」、Ｐ．３，研究社、東京、１９９５.

１２）川端康成：前掲書、Ｐ．４９.

１３）川端康成：前掲書、Ｐ．５１.

１４）瀬戸内晴海：「かの子撩乱」、Ｐ．２３５，講談社、東京、昭和４１年.

１５）瀬戸内晴海：前掲書、Ｐ．２３６.

１６）岡本一平：「エゲリアとしてのかの子」（『岡本かの子の世界』）、Ｐ．３５，冬樹社、東京、昭和５１年.

１７）岡本一平前掲書、Ｐ．３５.

１８）成田十次郎：「スポーツと教育の歴史」、Ｐ．１５６，不昧堂出版、東京、昭和６３年.

１９）岡本かの子：「健康三題—春の濱別荘—」、（『岡本かの子全集』第１巻）、Ｐ．３９２，冬樹社、東京、昭和４９年.

２０）瀬戸内晴海：前掲書、Ｐ．１４９.

２１）岡本かの子：「梅・肉体・梅」、（『岡本かの子全集』第１４巻）、Ｐ．３４６～３４７，冬樹社、東京、昭和５２年．岡本かの子のダルクローズの師匠と思われる人物については『やがて五月に』Ｐ．３８７に簡単な記述がある。

２２）岡本かの子：「肉体の神曲」、（『岡本かの子全集』第２巻）、Ｐ．８，冬樹社、東京、昭和４９年.

２３）岡本かの子：「肉体の神曲」、Ｐ．３３５.

２４）武田勝彦訳：「かの子の西欧観」、（『岡本かの子全集』第２巻）、Ｐ．８，冬樹社、東京、昭和４９年.

２５）岡本かの子：「仏教人生読本」、Ｐ．１４１～１４２、中央文庫、東京、２００１年.

２６）　岡本かの子：「英国のスポーツ」（『岡本

集』第１１巻)、Ｐ．２５１，冬樹社、東京、昭和５１年.
２７）岡本かの子：「英国のスポーツ」、Ｐ．２３４.
２８）岡本かの子：「英国のスポーツ」、Ｐ．２３５.
２９）岡本かの子：「英国のスポーツ」、Ｐ．２３５.
３０）岡本かの子：「英国のスポーツ」、Ｐ．２３５.
３１）岡本かの子：「英国のスポーツ」、Ｐ．２３５.
３２）岡本かの子：「英国のスポーツ」、Ｐ．２５３.
３３）岡本かの子：「英国のスポーツ」、Ｐ．２３８.
３４）川端康成：前掲書、Ｐ．４５.
３５）岡本かの子：「快走」(『岡本かの子全集』第２巻)、Ｐ．１５５，冬樹社、東京、昭和５１年
３６）川端康成：前掲書、Ｐ．４９.
３７）岡本かの子：「スポーツ抒情」、Ｐ．３２９.
３８）岡本かの子：「渾沌未分」、(『岡本かの子全集』、第２巻)、Ｐ．５５，冬樹社、東京、昭和５１年.
３９）岡本かの子：「渾沌未分」、Ｐ．５４.
４０）岡本かの子：「娘」、(『岡本かの子全集』、第４巻)、Ｐ．１９９，冬樹社、東京、昭和５１年.
４１）岡本かの子：「娘」、Ｐ．２０３.
４２）岡本かの子：「丸の内草話」、Ｐ．３２２.
４３）岡本かの子：「丸の内草話」、Ｐ．３２２～３２３.
４４）岡本かの子：「丸の内草話」、Ｐ．３２２.
４５）岡本かの子：「丸の内草話」、Ｐ．３５２.
４６）岡本かの子：「丸の内草話」、Ｐ．３５２.
４７）岡本かの子：「丸の内草話」、Ｐ．３５２.
４８）岡本かの子：「丸の内草話」、Ｐ．３６４.
４９）近藤裕子：(『岡本かの子全集、作品解説』第４巻)、Ｐ．４４１，冬樹社、東京、昭和４９年.
５０）岡本かの子：「是非望ましいのは世界的選手」(『岡本かの子全集』第１２巻)、Ｐ．２４０，冬樹社、東京、昭和５１年.
５１）岡本かの子：「生々流転」、(『岡本かの子全集』第６巻) Ｐ．６６、冬樹社、東京、昭和５０年.
５２）岡本かの子：「生々流転」、Ｐ．６７.
５３）岡本かの子：「生々流転」、Ｐ．８７.
５４）岡本かの子：「生々流転」、Ｐ．１９２～１９３.
５５）岡本かの子：「生々流転」、Ｐ．１９３.
５６）岡本かの子：「スポーツ抒情」、Ｐ．３２９.
５７）岡本かの子：「気力と体力」、(『岡本かの子全集』第１２巻) Ｐ．１２４～１２５、冬樹社、東京、昭和５１年.
５８）岡本かの子：「スポーツと女性」、(『岡本かの子全集』第１２巻) Ｐ．３９１、冬樹社、東京、昭和５１年.
５９）岡本かの子：「スタンドの内外にて」、(『岡本かの子全集』第１２巻) Ｐ．２８７、冬樹社、東京、昭和５１年.
６０）岡本かの子：「是非望ましいのは世界的選手」Ｐ．２４１.
６１）岡本かの子：「戦争と女性」、(『岡本かの子全集』第１４巻) Ｐ．４４４～４４５、冬樹社、東京、昭和５２年.
６２）岡本かの子：「戦争と女性」、Ｐ．４４４.
６３）木下秀明：「スポーツの近代日本史」、Ｐ．１９３，杏林書院、東京、昭和５１年.
６４）岡本かの子：「婦人と体育」、(『岡本かの子全集』第１２巻) Ｐ．２１４～２１５、冬樹社、東京、昭和５１年.
６５）木下秀明：前掲書、Ｐ．２１０～２１１.
６６）岡本かの子：「是非望ましいのは世界的選手」、Ｐ．２４１.
６７）岡本かの子：「国民保健」、(『岡本かの子全集』第１３巻) Ｐ．１１９，冬樹社、東京、昭和５１年.
６８）岡本かの子：「婦人と体育」、Ｐ．２１５.
６９）岡本かの子：「スポーツと女性」、Ｐ．３８９.
７０）岡本かの子：「「婦人と体育」、Ｐ．２１５.
７１）岡本かの子：「スポーツと女性」、Ｐ．３８９.
７２）亀井勝一朗：「日本現代文学全集７１，作品解説」、Ｐ．３８８，講談社、東京、昭和４１年.
７３）川端康成：前掲書、Ｐ．５１.
７４）川端康成：前掲書、Ｐ．４９.

・井上俊也：「身体と間身体の社会学」、(現代社会学４)、岩波書店、東京、１９９６.
・須田　朗訳：「語り合う身体」、紀伊国屋書店、東京、１９９２.
・小口信吉訳：「身体と文化」、文化書房博文社、東京、１９９９.
・中島俊郎：「歴史と文学」、みすず書房、東京、２００１.
・石井洋次郎：「身体小説」、藤原書店、東京、１９９８.
・中村三春：「流通する身体」、(講座昭和文学史・第１巻)、小学館、東京、１９９８.
「モダニズム文芸とスポーツ―『日独対抗競』の文化史的コンテクスト―」山形大学紀要（人文科学)、平成３年.
・養老　猛：「身体の文学史」、新潮社、東京、２０００.
・三浦雅士：「身体の零度」、講談社、１９９４.
・中島俊郎：「歴史と文学」、みすず書房、東京、１９８８.
・田之倉　稔：「演劇都市と身体」、昌文社、１９８８.

(平成１６年３月１９日受理)